

南紀・台高・宮川・大杉谷／堂倉谷本谷

比良山系・安曇川・明王谷／奥の深谷

メンバー:三井(主記録)、白土、釘持
遡行日:10年4月29日~5月1日

G・Wというと南紀の沢に行っていた時期があった。が、ここ2年ほどは行っておらずシーズン当初から「今年は南紀に…」という思いに駆られていた。

元々暖めていたプランはあった。それは南紀、台高の宮川・大杉谷の「堂倉谷」で、関西の代表的名渓として知られていて、以前から行こうと思っていた。ただこの沢は1泊2日で、折角南紀に行くのにこれだけでは勿体ない。もう一本加えて日程を組もうか…。で選び出したのが比良山系明王谷の「奥の深谷」。日帰りの沢で「百名谷」に入っている。それで比良山系の沢となればこんな事でもなければ行く機会は無かろう。なかなか興味深い沢だしこれを抱き合わせればいい計画となる。単独でも行くつもりでいたがこの計画に白土君と新人の釘持さんが参加してくれた。

[4月29日]

明日からG・Wという28日の夜、富士から東名高速に乗り、高速道を乗り継いで南紀に向かう。渋滞もなく、白土君の的確なナビゲーションで迷う事もなく深夜(というより早朝)、大台ヶ原の駐車場に到着。

しかし小雨がパラつき、風が強くて震えるほど寒い。駐車場にはキャンプ禁止の看板があるので駐車場から少し戻ったわき道の隅にテントを張って仮眠とする。

直に夜が明けるも風も雨も止まず、それにこの寒さはどうだろう。この時期南紀には何度となく来ているがこんなに寒いのは初めてだ。とても沢、などという状況ではない。

本日は停滞か、と釘持さんにロープの結び方などを教えたり、またシュラフにもぐったりとグダグダとしていたが天気が気にかかる。

何度か外に様子を見に行くがそうこうしているうちに風はやみ、一部日差しもでてきた。「これなら行ける。」

慌ててテントを畳み、駐車場に戻ると手早くパッキングを済ませスタート。

遊歩道のような道を辿って日出ヶ岳に登る。大杉谷方面は通行禁止の大きな看板があるが承知している事でスルーして踏み込んで行く。

急な登山道をセカセカと下っていくと堂倉小屋に出るがこの先の登山道はご丁寧に金網を張って通さぬ構え。それを避けて更に下っていくと間もなく滝音が聞こえ、目の前に傲然と「堂倉滝」が姿を見せる。

落差は20mほどだが水量豊富な豪瀑で、激しく滝壺に瀑水を落として水煙を巻き上げている。

恐らく最近雨が多いので増水していることもあるのだろうがこれからの遡行の厳しさを感じさせるものだ。新人の釘持さんもいる事だし、気をつけないと…。と思う。

吊橋を渡って対岸にでるのだが橋の入り口もがっちり金網で塞がれている。橋を渡り、登山道を回りこんで行くと右手に手すりのついた急な踏み跡があり登って行くとリッジの上に出た。モノラックのレールがあり少し進むと右下にボロいロープが垂れ下がっている。ここが下降点のようだ。ロープをセットして懸垂で河原に降り、沢の装備に替える。目の前には7mの斜瀑があるのだが沢幅一杯に白く泡立って流れていて明らかに増水している事がわかる。

通常なら水流と側壁の間を登れそうだが今日の状態では避けた方が無難だ。右岸から小さく巻いて沢に降りる。

その先に30mの滝がやはり水量豊富に瀑水を落としている。踏跡を拾って左岸から巻く。



へつりや渡渉しながら進んで行くが、流れはそれほどきつくはないが水深がやや深く、腰上まできそうなので盛夏ならともかく、今は濡れないルートを探しながらの遡行となり手間取る。

大きなプール状の釜と出会う。ここも夏なら泳ぎが楽しそうだが今は冗談にもならない。



右岸側を少し高い位置でへつるがスリングが垂れているので問題はない。新人の釧持さんの動きも心配ないようだ。

巨岩帯を過ぎ、流麗な斜瀑を越える。関西有数の美渓といわれている沢だ、渓相はやはり素晴らしい。

間もなくアザミ沢の出会い。その手前、右岸側にまずまずのテン場があった。時間も頃合、出発時間が遅かったのもまだ大して進んでいないがこれまで、とする。

樹林が河原前まで降りていて、枯れ枝が散らばっているので薪を拾い集める手間がないのがいい。

ツェルトを張り、焚き火を起こして腰を落ち着ければ沢屋冥利につきる時間となる。たった一本の酒の缶がその至福の気持ちを高めてくれる。

明日からの天気も心配はないようだ、いい山行になりそうな予感。

[4月30日]

朝、既に青空が広がっている。

パッキングをすませテン場を後にする。直ぐにゴルジュになり、兩岸の巨岩が門のようになっていてその奥に滝が落ちている。左岸から越えると沢幅一杯にナメが広がっている。この谷のハイライト、「奥七つ釜」だ。

通常の水位ならそのまま進んでいけるのだが今日の水量では取り付けない。左岸を少し巻いてから懸垂でナメ床に下りる。

傾斜のあるナメに釜のように大きな穴が穿かれていて不思議な景観を見せている。

“七つ釜”と呼ばれる地形は各地色々な沢に存在するが本当に自然の造詣の不思議さに感嘆させられる。七つ釜最後の15mの斜瀑も水量が多く右岸から巻く。



更に歩を進めて行くと堰堤が現れ、その先は当然何も無い河原となり淡々と歩いて行く。やがて橋が沢を横切り、右岸に沿って林道が通っていて当然、その間は沢が荒れておりやるせない思いに駆られる。

石楠花沢を右に分けると沢は再びゴルジュ状となってその中に滝を次々と落として行く手を阻む。それらをどう乗り越えるか、自分の経験や技術をフルに活用して進んで行くころに何ともいえない沢の面白さがある。

二段25mの滝が現れる。下段は右が容易だが落差があるのでロープをつけ、カムと残置ピンでランニングをとって登る。上段も水流左に斜上する細いバンドがあって何とかかなりそうだがモロ、シャワーを浴びそう。

で、ここは左手から巻く。

15mの滝を左から越えると沢は細いトイ状の流れとなる。そして間もなく両岸が低いならかな疎林の斜面となり流れはその間を細いゴーロの平瀬となって緩やかに上にのびている。沢の終焉であろう。

ここまでくれば十分だ。右岸側に少し登れば登山道が走っている。

僕たちは沢から離れ、その右岸の斜面を登るとゆったりした尾根の踏み跡にでた。それを辿り、「尾鷲辻」にでると遊歩道のような登山道をのんびり歩いて駐車場に戻る。「終わった。」

何はともあれ温泉と食事だ。幸い、探し回るまでもなくその温泉と食事にありつくことが出来、気持ちも新たに次の「奥の深谷」に向かう。

西名阪高速道から名神高速道と乗り継いで仮泊予定の琵琶湖畔の道の駅に車を止める。最近は道の駅で仮泊する事が多いのだが、車の出入りが多いところだとその騒音でオチオチ寝てられないのだが、ここは第二駐車場があり、ひっそりとしていて安眠できた。

[5月1日]

琵琶湖から若狭路を北上、坊村から明王谷の林道にはいる。直ぐにゲートがありその手前の空き地に車を止める。

駐車地の横から即、入渓してもいいのだが通常は暫く林道を辿り、白滝沢の出会いから入渓するようで我々もそのルートをとる。

流程の短い小沢でこの沢が“百名谷”に選定されたのは何故か、はなはだ興味の湧くところだ。

出会いからしばらくは何の変哲もないが、7mの滝を右岸から巻くと小滝が続き、更にY字4m、二段8m、と次々と切れ間もなく滝が現れる。

更に続いて四段40mの滝が暗いゴルジュの中に現れる。細身の滝でくねるように落下して白龍の化身のような滝とでも言えはいいか。



普通、滝と滝の間には河原とかがあるものだがこの沢はそれがない。とにかく滝が連続する。それがこの沢の「売り」だろう。

巨瀑はないし、直登できない滝の巻きも容易なもので、自分たちの目的や技量に応じてルートを選択すればいいので、登り方次第で初心者でもベテランでも楽しめるように思う。

小さな斜瀑を越えると穏やかな平瀬となり、沢の雰囲気が変わる。「あれっ？」と思ったら登山道が沢を横切っていて沢の終了点にでた事が知れる。その登山道を辿って下って行き、白滝沢の出会いを経て駐車地に戻る。

着替えを済ませ帰途に着く。

久し振りの南紀の沢だったが「堂倉沢」は世評通りの名渓といってい。

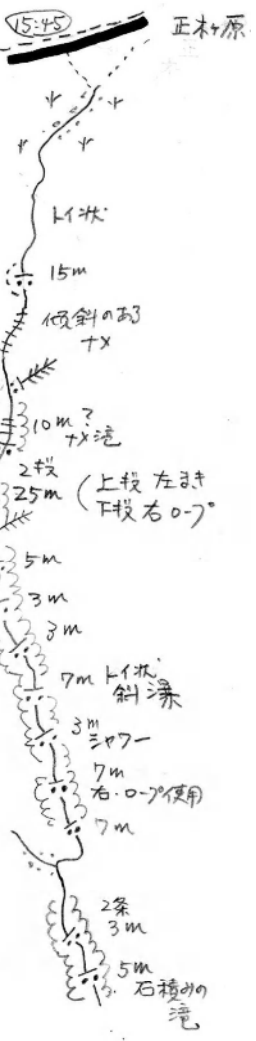
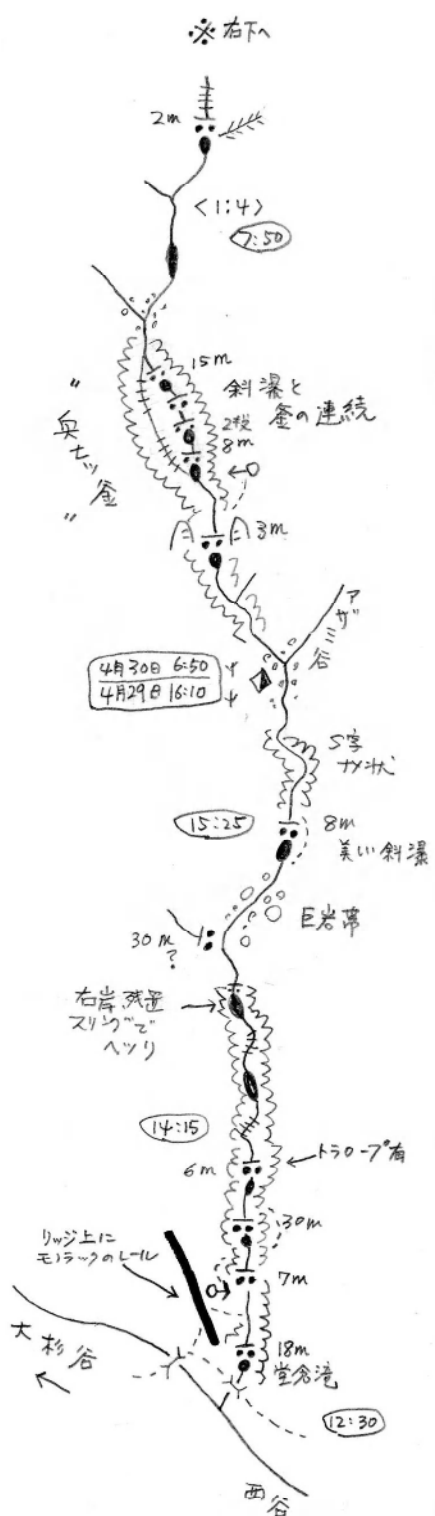
今回は水量が多く、また濡れる事を極力避けるルート取りをした為若干面白さをスポイルしてしまったかも知れない。濡れを気にしなく済む時期に遡行すればさらに楽しめたと思う。

また「奥の深谷」は比良山系という関東人には縁の薄い山域の沢だし、それが百名谷に選定されている、という事で期待というより「どんな沢なんだろうか？」という部分に興味があったのだが、出会いから終了点まで滝が切れ目なく続く稀有な渓相で、その滝群を登るにせよ、眺めるにせよ、中々興味深い遡行が出来るだろうし、この辺りが「百名谷」に選定された理由なのだろう。

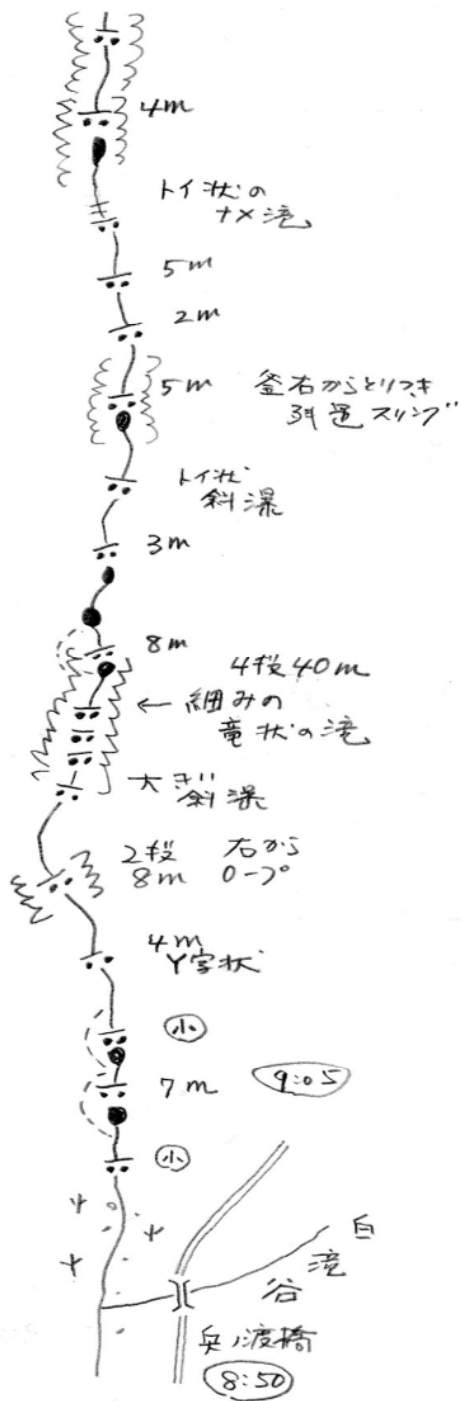
ただ3時間ほどで終了(勿論滝の登り方で時間は変わるが。)してしまうので少々あっけない気もする。

今回の山行は、初日の天気のリcoveryがもう少し遅れたら予定通りにはいかなかっただろうがメンバーの日ごろの行いがいいせいかな無事、予定通りにいき、楽しく、充実した山行が出来た。これも新人の釘持さんを気遣ってサポート役に徹してくれた白土君や、これが2回目の沢登り、という釘持さんの新人らしからぬ頑張りによってもたらされたものでお二人

には感謝したいと思う。



'10年4月29~30日
 南紀・台高 宮川・大杉谷 / 壺谷谷谷



'10年5月1日
比良山系 安曇川・明王谷/兵庫深谷